

樋口一葉



伍仟圓札肖像記念

文ふみの京みやこの文人を語る

白石奈緒美の

「裏紫」

作 樋口一葉

心の奥の音色が彩

共演 関根絹世



矢島 俊作「武士道」

作 新渡戸稲造

特別出演 十月二日(金) 松村彦次郎「おぼえ帳」四題

作 齋藤 緑雨

特別出演 10月2日(土)



和太鼓の会「鼓遊」

溝上伊都子「雪の旦」

作 樋口一葉

木村 紀子「文づかひ」

作 森 鷗外

菅原 三記「五重塔」

作 幸田 露伴

川嶋 徳人「雨ニモマケズ」作 宮沢賢治

三浦 匡以「月と山兔」作 小川未明

平成16年 10月1日(金)午後7時開演 2日(土)午後1時30分・5時開演

会場：東京・文京シビックホール(2階小ホール)(開場30分前)

〒112-0003 東京都文京区春日1-16-21
TEL03-5803-1100 FAX03-5800-2230

入場料：前売1,800円 当日2,000円

主催 蘭の會

共催 特定非営利活動法人 感声アイモ



お問い合わせ：〒273-0112 鎌ヶ谷市東中沢2-24-26 マロンドセブン中沢103
TEL 047-442-7737 FAX 047-446-5471 携帯 090-2916-2354

E-mail aimo@digibros.co.jp

心に響く声の音色感

八重桜が満開の法真寺境内（写真）。それは、樋口一葉が四歳から九歳まで住んだ家の隣で「ゆく雲」にある「桜木の宿」の桜。この法真寺では毎年十一月二十三日、瀬戸内寂聴さんを始め多くの文人を招き文京一葉忌を続けてきた。それも今年で二十五回を数えるが、現在は病床にある老和尚二十一世伊川浩永氏が一心に一葉さんを忍び、たゆみなく支えてきたたまものである。



法真寺一葉会館にて伊川浩永和尚と木村紀子さん



東大赤門前 法真寺の八重桜

全身障害と言語障害を乗り越える訓練中の川嶋徳人さん（写真）。全身を使って大きな声を出す訓練を続け、昨年は月一回のレッスン六ヶ月で始めて朗読に出演。発声による身体機能の向上訓練で今回立って朗読する。またその意欲と強い意志で自立に向かっている。そして同じ境遇の方達や自閉症・引きこもりと言った青少年達に勇気と生きる希望を与えるNPO法人感声アイモの特別指導講師として講演活動を通じて自立と社会貢献の実現を目指している。



川嶋徳人さん
（写真撮影 木村紀子）

黙読と朗読には大きな違いがある。声を出して読むと言うことの中には何かしら不思議な力を感じる。それは読み手の技量によって大きく左右されるであろう。問題はその中心にあるものは何か。作品への情熱、その神髄に迫る精神的なもの、文字に書き表せないものとは、まさに心を伝える音色である。所詮文字には限界がある。芸術性が高ければ高い程文字では描ききれない行間に込められた鋭く高潔なものが存在している。朗読はそこに込められた心の探究が求められる。教育の中で心の問題が問われている。この問題こそ、その行間を感じ取る感性力にある。通信技術の発達によるメールやチャットなどが氾濫する現在、心を伝える美しい日本語の音色を学ばずに、音色のない文字の世界だけで人間のやさしさや暖かい心が育成できるとは思えない。

美しい日本語の発声が全身障害と重度の言語障害を克服するエネルギーになった。声に心を感じる訓練が心と精神の健全な育成に大きな力を発揮し、自閉症・知的障害・行動障害などと言われる人の心を開いた。

あらゆる教育の場で美しい日本の感性の音が響き渡れば樋口一葉の生きた明治の精神をもっと深く感じ取り、誇り高く心豊かな人間性が養われるに違いない。



佐渡稚泊港で朝日を受けて発声練習する菅原三記さん

演 出 菅原三記
舞台監督 小松雅樹